

令和7年度 熊本大学大学院社会文化科学教育部 博士後期課程文化学専攻への新コースの設置について (予告)

熊本大学大学院社会文化科学教育部では、令和7年4月に、
博士後期課程文化学専攻に、新たに現代文化資源学領域を設置します。

なお、入学者選抜については、募集要項にて発表します。

2024年8月

目的

失われる前にアーカイブ化しておくべき有形・無形のさまざまな文化資源を収集・分析・整理する能力を身につけることで、新たな価値を創造し、社会に向けて発信できる人材を養成するため、大学院社会文化科学教育部(博士後期課程)文化学専攻に新たに「現代文化資源学領域」を設置する。

また、令和4年(2022年)10月に設置された「文学部附属国際マンガ学教育研究センター」と連携し、アーカイブ化による地域文化資源の開発やこれに関わる研究者の人材育成を本領域が担うことになる。本領域の修了者は、現代文化を対象とした研究に携わるのみならず、国・地方公共団体、大学等の研究機関が設置する施設における記録・アーカイブズ管理の専門家、博物館、美術館及び資料館など、現代文化資源関連の文化施設における資料管理の専門家等で活躍が期待される。このほか教育、出版、広告及び行政等の幅広い分野で専門知識・技能を生かすことができる。例えば、文化行政に関連した国・地方公共団体等の職員やメディア芸術(マンガ、アニメ、ゲーム等)、現代文化資源関連の一般企業がこれに当たる。博士号取得により日本国内にとどまらず海外の大学においても研究者として活躍することが期待される。

ディプロマ・ポリシー

①学位授与の要件

学位は、当該課程を修了した者に対して授与する。修了の要件は、当該課程に3年以上在学し、所定の単位(必修科目を含む14単位以上)を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、学位論文の審査及び最終試験に合格することが必要である。ただし、優れた業績を上げた者は、2年の在学で修了することができる。

②修得すべき知識・能力

＜現代文化資源学領域＞

1.高度な専門的知識・技能及び研究力

- ・本専攻においては、歴史学、考古学、民俗学、日本・東アジア・欧米の言語と文学、現代文化資源学の諸領域において、文化的諸課題に関する自立的な研究活動を遂行することのできる、豊かな学識を基礎とした、より高度な研究能力、専門性、応用力を修得している。
- ・現代文化にかかわる各専門分野における高度な専門知識と研究遂行能力を有し、独立した研究者あるいは高度専門職業人として各分野の学術的發展に貢献しうる能力を修得している。

2.学際的領域を理解できる深奥な教養力

歴史学、考古学、民俗学、日本・東アジア・欧米の言語と文学、現代文化資源学の諸領域における知識・技能・方法を理解・修得する教育プログラム及び農業・農村工学、石学・昆虫学・貝類学・堆積学・人類学及び工学(都市計画)等他領域との学際的な研究活動を通して、内部において多様な学問領域を修め、さらに外部において異質な性格を持つ学問領域に積極的に飛び込み、多様な学問領域を理解できる深遠な教養力を身に付けている。

3. グローバルな視野と行動力

本専攻における対象地域は日本・東アジア・欧米等、世界の全域にわたる。英語教授学領域には英語、歴史学領域には日本史・東洋史・欧米史・文化史・考古学、日本・東アジア文化学領域には日本文学・中国文学・韓国文学・民俗学、欧米文化学領域には英語・仏語・独語、現代文化資源学領域にはメディア論(マンガ・映画)があり、各領域において一定度のグローバルな視野を身に付けている。さらに、領域を超えての受講を通して、より多様な国家・地域・文化を考究する学問への視野を身に付けている。また、それぞれの学問領域において、積極的な現地実習、調査、学会活動を通じてグローバルな視野に基づく行動力も修得している。

4. 地域社会を牽引するリーダー力

- ・研究者、高校・中学等の教員、文化行政担当者、学芸員、等々、文化行政や教育行政の多方面にて活躍できる知識・能力を修得している。
- ・文化行政においては、地域において重要な様々な文化的事象(埋蔵文化財・史跡・史料・無形民俗文化・民具等)を掘り起こし、記録、保存、展示・公開、もしくは地域資源として整備し活用するために必要な技術や知識を修得し、文化行政面における卓越したリーダーたる能力を修得している。
- ・教育面においては、児童・生徒により深い知識を効率的に修得させる技術、修得した知識を現実社会で活用できるよう教導する技術を修得し、地域教育の推進の先頭に立つリーダーたる能力を修得している。

カリキュラム・ポリシー

①全体の方針

本専攻は英語教授学、歴史学、日本・東アジア文化学、欧米文化学、現代文化資源学の5領域からなる。前期課程での高度専門職、研究者育成カリキュラムを引き継ぎ、より高度な知識・能力を修得するカリキュラム構成を行っている。授業科目は、主として(1)総合演習(1年次の必修科目であり、最新の理論や実践的成果を扱うゼミナールと研究計画・経過の発表討論を行う)、(2)個別演習((1)以上に専門的な分野に即した調査・分析能力の強化を目標とする科目であり、内容に応じてゼミナール、フィールドワークまたはワークショップが行われる)、(3)特論(より高度な知識、応用力を修得する科目で、講義やワークショップ形式で行う)、(4)特別研究(複数の指導教員からの博士論文作成に向けての個別指導)からなる。これらに加えて、研究経過報告会(年に1度行われ、在学中2回発表することが義務づけられている)、ならびに教員と学生の共同研究プロジェクト(「プロジェクト研究」として単位化)を実施している。

② 教育課程編成の方針(「修得すべき知識・能力」への対応)

(1) 高度な専門的知識・技能及び研究力

各領域において、特論・演習・特別研究を各々実施している。ここでは、本専攻を構成する英語教授学、歴史学、考古学、民俗学、語学、文学、現代文化資源学における最新の研究成果、現在における各学会での論点や新たな説に触れることができ、史資料を用いた読解、遺跡や現場における調査・発掘・記録、調査資料分析と論文構成等々、高度な学問的訓練を実施している。研究活動を行う上で必要な専門的かつ実践的知識・技能を修得しうるカリキュラム構成となっている。

(2) 学際的領域を理解できる深奥な教養力

英語教授学、歴史学、考古学、民俗学、語学、文学、現代文化資源学の専門学問領域で、本専攻の各領域は構成される。一方で、理論、応用論、方法論や、社会構造論、社会規範論、文化行政論、そして調査分析論、経営・社会論等、各専門領域に共通するテーマによる特論、演習を設けている。学生は、専門・領域を超えてこれらを相互に受講することが可能である。カリキュラムは学際的に構成されている。

(3) グローバルな視野と行動力

英語教授学領域では英語を介したグローバル化への対応力を育成するための理論、方法、実践についての演習が生まれ、歴史学領域では日本・東洋・西洋・北アジアと世界を網羅する歴史学、考古学の演習・特論が生まれ、日本・東アジア文化学領域、欧米文化学領域では日本・中国から英米・ドイツ・フランスに至る文学・語学と、民俗文化調査の特論・演習が生まれ、現代文化資源学領域では、トランスナショナルな現代の諸文化を対象とした学際的な特論・演習が生まれ、グローバルな行動力を養成するカリキュラム構成となっている。

(4) 地域社会を牽引するリーダー力

英語教授学領域では地域における英語教員のリーダー育成を目的として、応用言語学、第二言語習得論等の特別演習をカリキュラム化している。また歴史学領域の遺跡遺物論、文書群解析の演習と文化行政特論、日本・東アジア文化学領域の民俗調査分析特論等は、地方の行政調査として行われる文化資源調査のエキスパートを育成するカリキュラムであり、文化資源の発掘・調査・利活用等、文化行政面でのリーダー力を養成するカリキュラム構成となっている。現代文化資源学領域では、国・地方公共団体、地元企業等と協力した文化事業への参画の機会を、実習等を通じて提供する。

③ 教育課程における教育・学習方法に関する方針

- (1) 講義においては、基本的知識を丁寧に説明し、発展的な内容については研究の背景を説明するなどして、知的好奇心と学修意欲を高める。講義を聴き、講義ノートを復習することで、知識の確実な理解・定着が可能となる。
- (2) 演習では、文献・資料の読解による分析・解析の能力とともに、現場での調査等による実践的知識・技能を修得する。人文科学の専門知識を活用・発展させる、より高度な応用力を涵養する。

④ 学修成果の評価の方針

- (1) カリキュラム・ポリシーに沿って実施される各授業科目の学修成果、取得単位数及びGPA等を可視化することによって、教育課程全体を通じた学修成果の達成状況を測定・評価する。また、学位論文については、学位論文審査基準を明示し、その基準に基づき適切に評価する。
- (2) 学修成果は、開講科目毎にシラバスに示す学修目標等の達成状況から「評価方法・基準」により評価する。
- (3) 学修成果の「評価方法・基準」は、筆記試験、レポート試験、演習への積極的な参加等によるが、評価は、科目の特性に応じて公正かつ的確に実施する。

アドミッション・ポリシー

◆求める学生像

英語教授学、歴史学、考古学、民俗学、日本・東アジア・欧米の言語と文学、現代文化資源学の諸領域において、文化的諸課題に関する自立的な研究活動を遂行することのできる、豊かな学識を基盤とした、より高度な研究能力、専門性、応用力を育むことを目標とする。以上のような観点から、本専攻は次のような人を求める。

1. 英語教授学領域：応用言語学、英語教育学、第二言語習得論、心理言語学、研究方法論等の最新の理論的枠組み・研究成果を批判的に考究し、現在の英語教育が抱える理論的・実践的課題への応用を図り、研究者及び高度専門職業人をめざす人
2. 歴史学領域：高度の専門的学力を身に付け、研究機関において学術の発展に寄与することをめざす人、また博物館や自治体等において文化行政業務の質的向上をめざす人
3. 日本・東アジア文化学領域：日本と東アジアの民俗文化、言語、文芸それぞれに関する研究を深めるとともに、東アジアの文化全般にわたる知見を身に付け、各専門分野の研究者及び高度専門職業人をめざす人
4. 欧米文化学領域：英米語学・文学、ドイツ語学・文学、フランス語学・文学をはじめとする各専門分野における研究者及び高度専門職業人をめざす人
5. 現代文化資源学領域：現代文化にかかわる各専門分野における研究者及び高度専門職業人をめざす人

◆入学者選抜の基本方針

- ・一般入試、社会人入試及び外国人留学生入試筆記試験、面接、出願書類を総合して判定し、入学者を選抜する。

本件に関する問合せ先

熊本大学人社・教育系事務課

社会文化科学教育部教務担当

電話番号 : 096-342-2399

メール : jsj-daigakuin@jimu.kumamoto-u.ac.jp